

「アートでつながる・広がる」

瀬戸内国際芸術祭が始まりました。「アート」を切り口に瀬戸内海とそこに浮かぶ7つの島々の自然や人の営みの現状と課題を洗い出し、「海の復権」、「地域の活性化」につなげていこうとする壮大な企てを持ったお祭りです。ここでは「アート」は、鑑賞の客体であると同時に、人と人、人と地域、地域と世界の「つながり」と「広がり」を作っていく力を持つ触媒としての役割を期待されています。

会場の一つであるハンセン病療養所「大島青松園」のある大島では、名古屋造形大学の「やさしい美術プロジェクト」が準備を進め、「GALLERY 15」での展示や大島で採れる土で作った器でお茶や手作りのお菓子を楽しめる「カフェ・シヨル」のほか、ワークショップなど体験プログラムも用意された「つながりの家」が展開されています。長い間差別と強制隔離に耐えてきた入所者たちが、アートを通してより多くの人と交流し、社会とつながりを持てるようにとの試みです。100人余りの入所者の平均年齢が約80歳となった国立療養所と白砂青松の美しい大島の将来を、皆で考えていくきっかけになってほしいと願っています。

また、本市では、芸術祭の開催を契機として、全国的にも珍しい、「芸術士」を保育所に派遣して子どもたちに芸術に直接触れる機会を提供し、感性や創造力の育成を図ろうとする事業を今年の11月から始めています。芸術士が分担して市内28の公私立保育所に赴いて、子どもたちと一緒に創作活動を行っています。現場では若干の戸惑いはあるようですが、「芸術士ならではの感性と芸術性が感じられ、子どもたちは大好きだ」などの声が寄せられており、おおむね好評で、活動は徐々に軌道に乗ってきているようです。高松市美術館では、8月31日から9月5日までの間、芸術士と一緒に制作した子どもたちの作品展を開催しています。加えて、8月29日までサンポート高松において、障がい者のアートの祭典「瀬戸内ハート・アートフェスティバル」も開かれていたところです。

アートのつながる力、広がる力により、幼児や障がい者、高齢者などの福祉が増進し、新しい創造が生まれ、地域の大きな活力となっていくのではないかと今後の展開を期待しています。